「笹川杯作文コンクール 2009」～中国語で応募～ 第４回優秀賞作品

※原文に忠実に和訳しました。

「お土産に迷う」

遼寧省　李晶

1975 年、母方の祖母が日本に行った。母の話によると、帰国後、、祖母は床に奇妙な代物をたくさん並べ、家族がそれを囲んで万華鏡を見るように覗き込んだそうである。服には赤い縁取りがついて、お姫様のスカートのようだった。箸は箱に納められており、模様まで入っていた。爪切りは、今でも皆が使っているのだが、中指程の長さがあり、とても精巧にできていた。最も訳が分からなく感じたのは、曲がった銀色の針金だった。誰かが、“髪を束ねるものか？”と聞くと、祖母は書かれた日本語を指さして “そうではなく、鍋を洗うものだ”と答えた。この時、祖母はきれいな服も沢山持ち帰っており、母はその一着をもらったのである。その後、母はそれを中庭で陰干しをしている時になくしてしまい、長らく気に病んでいた。

1987 年、祖父も日本へ行き、オリンパスのカメラを持ち帰った。このカメラは家族全員のお気に入りの宝物で、皆が争って使い、数え切れない程多くの素晴らしい写真を撮ってきた。その後、カメラは私の物となり、十数年が過ぎたが、私のカメラは品質が良いと撮影の先生から言われている。デジタル製品が大手を振っている現在でも、時々このカメラでフィルム写真を撮っている。

1990 年代の初め、おばが日本へ行った。彼女は、“同行した人の多くは何も買わなかった”と言いながら、大型カラーテレビを持ち帰った。副画面付きのものだった。カラーテレビは日本で買う方が国内より安い上、副画面付きのものは国内でまだ売られていなかった。

1996 年、母も日本に行った。母は服を一枚も買って来なかった。母曰く、「多くの服が“MADE IN CHINA”であることが一目で分かって、日本で中国製の物を買ってどうするの？」と。だが、彼女が買ってきた子犬や子猫のぬいぐるみはリアルな作りでお気に入りの物になったが、よく見るとやはり“MADE IN CHINA”の文字があった。「明らかに中国産なのに、なぜ、こんな良くできた物をこの辺のお店で買うことができないの？」と母は憤っていた。

その後、親友達が日本に行ったが、私は、幼い頃のように期待することはなかった。彼らは帰国すると、海苔とカレーのルーをたくさん持って来てくれ、海苔のおにぎりを食べられたことはとても嬉しかった。カレーライスを食べようものなら、クラスメイトに一日中自慢できる程だった。しかし、何年も経たないうちに、カレーの素も海苔も中国のスーパーで普通に見かけるようになった。味もほとんど遜色なかった。もし、日本料理店に行けば、日本と同じような正統的な日本料理が食べられただろう。

一昨年、仕事で日本へ行く親友から、帰国時に買ってきて欲しい物があるかと聞かれた。「何がいい？カメラ？」国内にもある。世界中にアフターサービスがあるし、物も同じだ。「服？」東京の街に先月あった物が、今月にはもう近くの店で見つけられる。「おもちゃ？マンガ？」ネットで探せば、たくさん売りに出されていて、日本で代理購入してもらうことさえ可能である。ふと思い出したのは、母が 1996 年に日本へ行った時に持ち帰ってきた小豆島の特産品だった。佃煮とやらでとても美味しく、十数年も食べていなかったので、非常に懐かしく感じた。親友が実際に持ち帰って来てくれる頃には、感嘆を禁じ得ないだろう。この時代、買えない物などない。

数日前、伊勢丹デパートを見て回っていたら、海苔の煮た物を見つけた。国産品だった。買ってみると、何と佃煮ではないか！中日両国は広い海を隔てているが、互いの距離は日に日に近くなっていると自らの経験から感じた。そこで、心配になった。一次に別の人がまた日本へ行く時、何を持ち帰ってもらおう？或いは、自分が日本に行くとしたら、みんなに何を持ち帰ろう？考えてみた。持ち帰れるものと言えば、やはり素晴らしい印象と目新しい見聞だろうと思った。